

百濟武王の王妃と義慈王の生母に関する考察

南 廷 昊
植田 喜兵成智 訳

1. はじめに

2009年弥勒寺跡の西塔から舍利奉安記が発掘されて以来、武王代の政治状況の変化および武王の王妃に関する議論が継続している。武王の王妃である善花公主が弥勒寺の創建を発願したという『三国遺事』武王条の記録と異なり、弥勒寺の西塔から出土した舍利奉安記^[1]には「我百濟王后佐平沙毛積徳女」^[2]が弥勒寺創建の発願者として記録されていたからである。新しい資料の発掘によって、多くの研究者たちが百濟武王代の政治状況と政局運営の変化について論文を発表した^[3]。特定部分においては、多少論争が整理されてきている点もあるが、むしろ意見の相違が大きくなっている部分も発生している。特に多くの論争的となっている点は、武王の王妃が誰であるのかということである。舍利奉安記に弥勒寺創建の発願者として沙毛王后が記録されていることから、『三国遺事』武王条の「善花公主」は説話上の人物とみなすべきであるという主張^[4]が提起されたが、一方武王の在位期間が長い点と、沙毛王后の他に別の王妃が存在していた可能性もあり、善花公主もやはり武王の王妃として認めるべきだという主張^[5]があり、善花公主の存在は認められるが、新羅王室の公主ではなく、益山勢力とみるべきであるという修正論^[6]が出てきており、武王の王妃をめぐる論争がいまなお続いている。また武王の王妃のなかで義慈王の生母が誰であるのかという問題と関連しており、各論者ごとに異なる結論が出されている状況である。武王の王妃が誰で、そのうち義慈王の生母は誰であるのかによって、武王代の政治状況をどのように理解するのが変わってくるため、この問題は武王代の政治状況を正確に理解するためには必ず解決しなければならない。したがって、本稿では、武王代の政治状況について理解するための土台として、議論の範囲をしぼって、武王の王妃は誰であるのか、そして義慈王の生母は誰であるのかについて、いくつかの史料と当時の政治的状況を考慮して明らかにしようと思う。

ところで、武王の王妃が誰であるのかという問題は、現在まで論争が続いている状況を考

慮すると、『三国遺事』武王条と舍利奉安記の記録だけでは解決することが難しいと考えられる。この問題を解決するためには、『日本書紀』皇極紀元年条の百済の政変に関連する記録をどのように理解するのかがということがさらに重要であると考えられる。『日本書紀』には武王の王妃と関連して「国主母」が出てくるが、この「国主母」を舍利奉安記の沙毛王后と『三国遺事』の武王条の善花公主の記事と関連させて、武王のどの王妃であるのか、義慈王の生母であるのか否かについて把握する必要がある。そこで、三つの史料を詳しく検討し、現在までの研究成果を総合して、武王の王妃についてどのように理解し、義慈王の生母が誰であるのかを推定してみようと思う。

善花公主、沙毛王后、国主母、この3人の相互関係と義慈王との関係を把握することは、武王と義慈王代の政治状況に対する正しい理解のために、非常に重要なものだと考えられる。したがって、限定された史料によって、多くの部分を推定に頼らざるを得ないが、現在の状況からもっとも合理的な方向を模索してみようと思う。このような作業が武王代と義慈王代の政治状況に対する合理的理解をさらに一歩進めるための一石になることを期待し、先学諸賢の多くの叱正を乞う。

2. 研究史の検討

舍利奉安記の発掘以後、いくつかの歴史学会の発表会において、数多くの論文が発表されたが^[7]、そのなかで武王の王妃について言及している論文の内容を整理し、論争点をまとめてみよう。まず従来から武王の王妃として認識されている「善花公主」と、舍利奉安記に記録された「沙毛王后」の関係を主に言及し、次に『日本書紀』皇極紀の記事を中心に「国主母」についても着目し、その重要性を標榜している状況である。重要論文を整理すると表1のようになる。

上述の先行研究のなかで、論争点を選択してみると次のように整理できる。

第一に、『日本書紀』皇極紀の「国主母」^[10]は、義慈王とどのような関係であるのか。つまり「国主母」は、義慈王の生母であるのか否かという問題を解明する必要がある。

第二に、『日本書紀』皇極紀の「国主母」と舍利奉安記の「沙毛王后」はどのような関係なのか。「国主母」と「沙毛王后」は同一人物なのか、別の王妃なのかという問題である。

第三に、『三国遺事』武王条の「善花公主」^[11]は、どのような人物であり、義慈王との関係はどのようなものであったのかという問題がある。事実、上述のような論争を整理するためには、武王代の政治権力関係を分析する必要がある、その関係によって武王の王妃や義慈王の生母に対する利害関係が変わってくる。これまでの研究は、すべてそのような立場から

表1 武王の王妃についての研究史の検討^[8]

区分	『三国遺事』武王条の「善花公主」	弥勒寺跡西塔舍利奉安記の「沙毛王后」	『日本書紀』皇極紀元年条の「国主母」	義慈王の生母
金壽泰 (09, 10)	益山勢力(弥勒信仰) 武王の後妃	義慈王の母后とは見難く、「国主母」でもない	義慈王の母、武王の最初の王妃であり、泗泚基盤勢力 *翹岐と関連する王妃と想定	「国主母」 善花公主と対立
金周成 (2009)	説話上の人物	最初の王妃 王妃は正妃を意味し1名だけ存在	沙毛王后	沙毛王后
文安植 (2009)	益山勢力	武王即位初めに婚姻した豊章の母	沙氏王后	善花公主
朴賢淑 (2009)	真平王の三番目の娘、武王の庶妃	武王の正妃		
李道學 (2009)	真平王の三番目の娘で、武王が世に出る前に婚姻した最初の夫人だが早世	武王の後妃	(沙毛王后) 義慈の生母とみなせない	善花公主
李鎔賢 (2009)		武王の正妻	沙毛王后	沙毛王后
チョンジェユン (2009)	益山勢力	弥勒寺建立主体、義慈の継母で、牽制勢力	沙毛王后	善花公主
盧重國 (2010)	真平王の三番目の娘、武王の先妃	武王の後妃 (泗泚基盤勢力、年齢は高くない)		
姜鍾元 (2011)	益山勢力で第一妃	武王後期に婚姻した後妃	善花公主	善花公主
チャンミエ ^[9] (2012)	益山勢力		善花公主	沙毛王后
金英心 (2013)		義慈の太子冊封反対勢力	沙氏王后	

武王代の権力関係を中心に、武王の王妃と義慈王の生母をさぐっている。筆者は、そのような関係を、逆に追跡して、武王の王妃と義慈王の生母から検討してみようと思う。このようにすることで、従来考えられてこなかった部分を解明することができると思われる。

3. 『日本書紀』皇極紀元年条の「国主母」と義慈王の関係

『三国遺事』武王条に記録された「善花公主」を武王の王妃とみることができるのかにつ

いて、舍利奉安記に記録された「我百済王后佐平沙毛積徳女」はどのように理解できるのかということと関連させて、筆者は『日本書紀』皇極紀元年条に記録された「国主母」に対する理解をまず示そうと思う。該当史料を提示すると次のようになる。

A. 皇極元年(642)^[12] 2月丁亥朔戊子(2日) 阿曇山背連比良夫, 草壁吉士磐金, 倭漢書直縣を百済の甲問使がいるところに送り, 消息を尋ねた。甲問使は「百済国主が臣下に『塞上はつねに悪事を行っている。帰国する使臣に付いてくるよう要請するも, 天朝では許されなかった』と述べた」と答えた。百済の甲問使の僱人たちが「昨年11月大佐平智積が亡くなりました。また百済の使臣が崑崙使を海に放り投げてしまった。今年正月に(イ)国主の母(国主母)が死に, また弟王子兒翹岐, その母妹女子4名, 内佐平岐味, そして名高い人40余名が島に追放されました」といった^[13]。(『日本書紀』皇極紀元年)

まず史料Aの(イ)「国主母」が義慈王の生母であるか否かについてを検討してみよう。「国主母」を義慈王の生母とみる研究者と, 義慈王の生母ではないとする研究者に分かれている^[14]。このなかで「国主母」を生母とみる研究者も立場が分かれており, 金周成と李鎔賢は「善花公主」は説話上の人物であり, 舍利奉安記の「沙毛王后」だけを史料上に現れる武王の王妃と認める立場から, 「国主母」は沙毛王后であり, 義慈王の生母であると把握している。金壽泰は, 「国主母」と表現されていることから, 義慈王の生母であると推定し, 国主母がいかなる人物であるのかについては明確な立場を表明していない。姜鍾元は, 「国主母」を善花公主とみる立場から義慈王の生母であると説明している。

かかる見解のうち, 一番目の見解についてもう少し深く検討する必要がある。武王の王妃が当代の金石文である舍利奉安記に記録された「沙毛王后」以外にいないという立場, すなわち后宮は何人かいたのだろうが, 正妃は1人だけ存在したという指摘^[15]がある。これに対する検討をするためには, まず百済における王妃に関する概念を整理する必要がある。百済王妃の称号と格について, 百済では「妃」に対する汎称として「夫人」と呼び, 「夫人」は后宮ではなく, その所生が太子に冊封されたり, あるいはその他の功績や要因が作用したりして, 「大夫人=大妃=王后」となり, 「王后」が正妃になったという見解^[16]が目目される。百済では后宮ではない王妃(=夫人)が複数存在したとみる可能性が高いこれと関連して, 百済の王室の婚姻形態が一夫多妻制^[17]であったのか, 一夫一妻多妾制^[18]だったのかという問題が提起されるが, 上述したような王妃の概念に照らし合わせたうえで, 少なくとも武王代と義慈王代に母系を異にする王子の間の王位継承紛争が存在した状況を考慮すると,

一夫多妻制が実施されていたとみるのが正しいだろう。もちろん、王妃（＝夫人）たちの間に序列が存在し、死後王の墓とともに埋葬される権利は正妃である王后（＝大夫人）にだけ与えられたのだろうが、異なる王妃たちも財産相続権や子息の王位継承権は持っていたとみられる。そして、正妃である王后も死亡やその他の政治的要因によって、放逐されるなどして、交替する可能性も充分にあったと判断される。

他の研究者たちも武王の王妃が沙毛王后の他にいないという見解について反論を提起している^[19]。武王の在位期間が40余年になるほど長い点と、百済を含めた三国の王に何名かの王妃が存在していたことを簡単に見出すことができる点を考慮するなら、武王の王妃に記録された只一つの史料によって王妃を1人だけとみなすのは問題があるという指摘が出ているのである。特に、そのまま王后とだけ表現してもよい状況にもかかわらず、舍利奉安記ではあえて「沙毛積徳女」という表現を使ったのは沙毛氏の娘以外にも、別の家門出身の王妃が何人かいたからであり、いかなる王妃であるのかを明確にするため、そのように明記したと朱甫暉が指摘した^[20]ことに留意する必要があると考える。該当史料を提示すると次のとおりである。

B. ひそかに思うに、法王におかれてはこの世に出現なされ、根機にしたがい赴感なされ、衆生に应じて姿を現したのは、まるで水の中の月が輝いているかのようにであった。そうして王宮にお生まれになり、娑羅双樹のもとで涅槃をお示しになり、八斛の舍利を残され、三千大千世界に利益することになられた。ついに五色に光る（舍利）を七回めぐらせることによって、その神通変化は不可思議であった。（口）我らの百濟王后におかれては、佐平の沙毛積徳の娘として、長い歳月に善因を播かれたことによって、今生では優れた勝報を受けて御生まれになった。（王后におかれては）万民を慈しんで下さり、三宝の棟梁となられたことで、恭しく浄財を喜捨されて、伽藍を立てられ、己亥年正月29日に舍利をお迎えになった。

お願いでございます。代々行ふ供養を永遠に尽きることなく、この善根によって、仰ぎて資糧となり、大王陛下の寿命は山岳のように堅固にし、治世は天地とともに永久であり、上には正法を広め、下には蒼生を教化させて下さい。

またお願いします。王后の心は水鏡のように法律界を常に明らかに照らされ、身は金剛のようで、虚空とともに不滅であられ、七世久遠に福を与えられ、すべての衆生とともに仏道を成させて下さい^[21]。（弥勒寺西塔舍利奉安記）

もし正妃である王后が1人しかいないならば、百濟王后とのみ記録すれば、誰のことを指

しているのかを理解できる。しかし、王后が沙毛積徳の娘であることを明らかにしているのは、沙毛氏以外の王妃が存在していたため、どの王妃であるのかを明確にするため、出身を書いているのだとみることが正しいだろう。

たとえ正妃である王后は、1人だけであるということをも認めるとしても、武王の王妃が沙毛王后のほかにはいないとするのは難しい。舍利奉安記の内容は武王39年当時に、武王の王妃が沙毛王后だったことを伝えてくれるだけであり、沙毛氏が武王と最初に婚姻した正妃であったと断定することはできないという見解^[22]も提示されている。百済の王室が一夫一妻制を維持していたと考えたとしても、武王39年以前に別の王妃がおり、死亡などの理由で王妃が変わった可能性はいくらでもあるのである。舍利奉安記が教えてくれる情報は、武王39年には、沙毛王后が王妃であったということに限定されているのである。したがって、武王の王妃を舍利奉安記の「沙毛王后」1人だけとみるのは難しく、何人かの王妃がいた可能性を認めるのが正しいと考えられる。

次に「国主母」を義慈王の生母とみなす立場を検討してみると、「国主母」という文字の意味から義慈王の生母と判断できる可能性は充分にあるが、そのように断定するのは難しいだろう。「国主母」という用語の用例が出てくるのは『日本書紀』のこの記事1か所のみであり、中国や韓国の古代史書には出て来ないことから、文字の意味だけから判断するよりも、別の状況から考慮して生母であるのかわからないのか生母でない母を意味するのか把握する必要がある。

したがって、「国主母」についての理解のためには、史料Aの『日本書紀』皇極紀元年の記事に現れた百済の政変の性格を吟味する必要がある。このときの政変は、義慈王と母后（国主母）を中心にした義慈王の反対勢力（翹岐、岐味など）が対立していたが、国主母が死ぬと、義慈王が王権を強化するために国主母と結託していた反対勢力を除去したといえる^[23]。史料を丁寧に読んでみると、国主母の死から政変が触発されたことから、政変の性格をそのように規定できるのである。特にこの政変の性格と関連して注目される記事がある。

C. 舒明3年3月庚申朔 百済王義慈が豊章を送り質とした。（『日本書紀』舒明紀3年）

史料Cの舒明3年は、631年であり、義慈王が太子に冊封された年の前である^[24]。豊章は武王の息子であり、義慈の異腹兄弟^[25]として義慈王との太子競争に敗れ、倭に外交使節として派遣されたとみられる^[26]。この史料と義慈が太子に冊封された年が武王の33年であり、かなり遅い点とあわせて、義慈が太子として冊封されるまでは異腹兄弟である豊章を支持する勢力から牽制を受けていた状況であったことは、多くの研究者が同意している。この

ように豊章が倭に赴いた後、「国主母」を中心に豊章の息子である翹岐^[27]らが勢力をつくりあげ、依然として太子義慈を牽制している状況であり、そのようななかで「国主母」が死亡すると、国主母と結託した勢力を除去し、義慈王の親政体制を強化しようとしたのが、まさしく642年の百済政変である。そのように考えると、「国主母」と義慈王は、互いに異なる権力関係を持ったものとして理解するほかになく^[28]、国主母と義慈王を実の母子関係としてみるのは難しいのである。それで金周成は、このような対立関係を設定しつつも、「国主母」を義慈王の生母と見なしたため、「なぜこのように義慈王が自身の外戚勢力（沙氏勢力）から排除されたのかわからない」^[29]と述べている。つまり「国主母」を義慈王の生母とみると、国主母と義慈王のあいだの対立関係を合理的に説明できなくなるのである。

もし義慈王と「国主母」を実の母子関係と設定しようとするなら、なぜ母子間で互いに異なる権力関係を持つことになったのか、義慈王がなぜ外戚勢力から見捨てられたのかを説明する必要がある。一つの可能な説明があるとすると、『日本書紀』舒明紀3年に倭へ送られた「豊章」を「国主母」の別の王子と認識し、同腹兄弟同士の太子冊封のための競争を繰り広げたのではないかということである。しかし、やはりそのように考えると、なぜ義慈王の母と外戚勢力は元子である義慈を除き、その弟を支持したのかという問題を解明しなければならない。別の方法としては、この政変の性格を新たに規定して、義慈王と母后勢力の対立から触発された事件ではないことを明らかにしなくてはならない^[30]。このような問題が解決されないかぎり、「国主母」は義慈王の生母とみるのは難しいのである。

以上みてきたように、『日本書紀』皇極紀の「国主母」は、義慈王とは権力関係が異なり、義慈王の生母とみるのは難しいと判断できる。

4. 『日本書紀』皇極紀の「国主母」と舍利奉安記の「沙毛王后」の関係

それでは『日本書紀』皇極紀の「国主母」はどのような王妃であるのかという問題があるが、表1の内容をみると、やはり「国主母」を沙毛王后とみる見解と、善花公主とみる見解に分かれている。

まず「国主母」と舍利奉安記の「沙毛王后」との関係を見ることにしよう。舍利奉安記が記録された時は、639年であることから、この当時武王の王妃は「沙毛王后」であるのは間違いない。「国主母」が死亡した時点は、642年であり、舍利奉安記と3年しか時間的差異がない。百済王室の婚姻形態が一夫多妻制であったならば、1年後、国王が死亡する状況で王妃が変わったとみるのは難しいことから、「国主母」は沙毛王后である可能性が高い。しかし、既に言及したとおり、百済の王室では一夫多妻制が施行されている可能性が高いので、

別の王妃が共存することができ、沙毛王后であると断言はできないと思われ、異なる要素を勘案して考えてみなくてはならない。

そのような点から史料Aをみてみると、百済の政変とみることができる一連の事件のなかで、もっとも早く言及されたのが「大佐平智積」の死であった^[31]。この大佐平智積は、沙毛積徳と同一人物であり、沙毛氏勢力がこの政変にかかわっていることがわかる。一連の事件のなかで一番最初のものが沙毛積徳の死であったのである。そして国主母の死と翹岐らが追い出された状況が一つに結び付いていることから、このときの「国主母」はやはり沙毛氏と関連がある人物とみるほかない。そのように考えると「国主母」はまさしく舍利奉安記の「沙毛王后」とみるのがもっとも合理的だろう。

一方、「国主母」を善花公主（益山勢力）とみる姜鍾元、チャン・ミエの見解があるが、まず姜鍾元の見解を検討してみよう。姜鍾元は、武王が新羅の王室の善花公主と結婚したのではなく、益山勢力である善花公主と結婚したのだという金壽泰の見解^[32]と、沙毛氏の王后は武王の第一妃ではなかった可能性が高いという盧重國の見解^[33]に従い、武王が即位する前に生まれた義慈^[34]は、益山出身である善花公主の実子であるとみた。また義慈王が太子として冊封されるのは、泗泚還宮以後であることから、泗泚を基盤にした沙氏勢力との妥協の結果とみて、沙氏勢力が義慈を支持する理由としては武王と後に婚姻した沙氏の王后所生の王子がまだ幼かったためであるといっている。そして「国主母」は、義慈王の実の母であり、益山出身の武王第一妃であるといった。この政変は、益山勢力が豊章勢力を支持すると、義慈王が沙氏勢力とともに益山勢力を中央政治から完全に放逐しようとしたのだと考えた^[35]。ところが、そのように考えると、すぐ提起される問題が「国主母」は義慈王の生母であるにもかかわらず、なぜその死によって政変が触発されたのかということである。そのうえ、益山勢力は、義慈王の生母と結託した勢力であるにもかかわらず、なぜ義慈王ではない豊章を支持したのかということも疑問である。益山勢力である「善花公主」が義慈王の生母であるのに、益山勢力と生母である善花公主が義慈王に敵対的な勢力であり、義慈王の生母ではない沙毛王后と沙氏勢力が義慈を支持したという結論になったのである。このような結論が導き出されたのは、益山勢力の王妃を第一妃とし、沙氏の王妃を第二妃として設定したためだと考えられる。そこで、武王の後半期に新たに王后になった沙氏王后所生の王子は年齢が幼く、太子として冊封されるのが難しかったので、義慈を支持したとみている。ところが、その根拠となる盧重國の見解をみてみると、舍利奉安記に現れた沙毛王后はそれほど年齢が高くないことから武王の第一妃とみるのは難しいのである^[36]。しかし、筆者は舍利奉安記を通じて沙毛王后の年齢を斟酌できるのか疑問を持っている。むしろ、舍利奉安記に現れた沙毛王后が3年後に死亡する国主母であるとみるならば、年齢が高かったとみられる。

国主母の年齢は舍利奉安記ではなく『日本書紀』を通して推し量ることができる。

D. 皇極元年（642）5月丙子 翹岐の息子が死んだ。このとき翹岐と彼の妻が息子の死んだことをはばかり、喪葬には出なかった。（『日本書紀』皇極紀元年）

『日本書紀』皇極紀に現れる翹岐を豊章の息子で、国主母の孫とみたとき^[37]、史料Dのように翹岐が倭に渡った年に翹岐の息子が死亡していることから、翹岐は最少で20代とみられ、豊章は40代、国主母は60代と考えられる。60代の国主母が老齢によって死亡したとみるのが自然である。

国主母（沙毛王后）の年齢を通じて武王の王妃になった時点を考えてみると、沙毛王后は武王後期に若くして新たに選ばれた王妃とみるのは難しい。少なくとも武王即位の初期に王妃になったのである。武王の年齢を考えたとしても、やはり同様である。武王は615年に生まれた扶余隆（義慈王の息子）を通じて年齢を計算すると、だいたい575年ごろに生まれたとみられる。武王が法王の息子とみて、威徳王が525年生まれ^[38]であることを基準にして計算すると、威徳王の弟である恵王を528年ごろの生まれとみて、息子である法王が548年、武王が568年ごろに生まれたとみなすことができる。おおよそ計算してみても、武王は即位時に26歳から33歳程度であったことがわかる。当時、20歳前にすでに結婚し、出産していたことから、生まれた年はさらに遡る可能性もある。いずれにせよ、このような武王が在位後半期である、沙乞が登場する武王28年^[39]を基準にして計算すると、武王は50代中盤から60代初めの年齢となる。可能性が全くないわけではないが、当時高齢であったとみられるところに、新たに若い王妃を迎えて、執権勢力を変えるということは現実的ではないだろう。すでに息子である義慈王の年齢が30代中盤以上になっていたことから、息子たちの婚姻を通じて権力関係を調整しようという試みるのがより現実的であろう。このような観点からみると、「沙毛王后」は、年齢が高いと考えられないことから「国主母」を益山出身の善花公主とみなすのは難しい。

またチャン・ミエは、義慈王が太子に冊封された時である武王の後期は、沙氏勢力が大きく浮上していた時期であったことから、義慈王が「沙毛王后」の息子であるとみている。そして『日本書紀』皇極紀の百済の政変は、義慈王と国主母と結託した勢力の成立とみなし、「国主母」と義慈王は実の母子関係ではないことから、「国主母」は善花公主であると判断した^[40]。しかし、沙氏勢力が権力を掌握した時点で、義慈王が太子に冊封されたとして、必ずしも義慈王が沙毛王后の息子であるとは考えられない。義慈王当時の執権勢力や、王妃所生ではなかったので、太子に冊封されることに困難があったとみたほうがよいと考えられる。

そうならば、逆に「国主母」と義慈王は、実の母子関係ではないことから、「国主母」は「沙毛王后」でなければならないことになる。

以上のように『日本書紀』皇極紀の「国主母」が誰であるのかについて考えてみたが、いずれにしても「国主母」は舍利奉安記の「沙毛王后」と考えるのがもっとも合理的な解釈であると判断できる。

5. 『三国遺事』武王条の「善花公主」と義慈王の関係

それならば義慈王の生母は誰であるのかという問題が残るが、現在まで史料上に残っている武王の王妃は『三国遺事』武王条に出て来る「善花公主」以外にいない。

E. 第30代武王の名前は璋である。彼の母は寡婦であり、都の南側の池のほとりに家を建て住んでいたところ、その池の竜と関係をもち、璋を産んだ。幼名は薯童である。才器と度量は大きく、計り知れなかった。つねに薯を掘って売り、生計をたてていたので、国の人々が薯童と名付けた。(ハ) 新羅の真平王の三番目の公主善花—あるいは善化とも書く—が優れて美しいという話を聞き、髪を剃り、新羅の都に来て、薯を町で子供たちに食べさせたところ、まもなく子供たちは親しみを覚え、彼についてくるようになった。そこで童謡をつくり、子供たちをたぶらかせて歌わせたが、その歌はこのようなものである。

善花公主様は人知れず交わって

薯童の部屋を夜にこっそり抱きしめて行く

童謡が都に広がり宮闕の中にまで聞こえると、百官が王に極諫して公主を遠いところに島流しにした。出発するとき、王后は純金一斗を路銀として渡した。公主が配流地に行く途中に薯童が現れ挨拶をし、御供したいといった。公主は、彼がどこから来たのかわからないものの、ふと信じることにし、なんとなく気に入った。こうして薯童を連れていくようになり、人知れず関係を結んだ。その後、薯童の名前を知り、童謡の霊験を知った。

ともに百済に至り、母后が与えた金を取りだし、将来生きて行く計画を立てようとすると、薯童は大きく笑って言った。

「これは何ですか」

「これは黄金です。一生の富となる価値があります」

「私が幼い時から薯を掘ったところに黄金を土の塊のように積んであります」

公主はこの話を聞いて大きく驚いて言った。

「それは天下の貴重な宝でありまして、あなたが今その金があるところを知っているならば、その宝物を父母のいらっしゃる宮殿に送るのはいかがでしょうか」

薯童が言った。

「いいでしょう」

こうして金を集め、山のように積み上げ、竜華山の獅子寺の知命法師のもとへ行き、金を運んでいく方法を尋ねると法師は言った。

「私が神通力によって送ることができるので、金を持ってきてください」

公主が手紙を書いて、金とともに獅子寺の前に持っていくと、法師は神通力によって一晩のあいだに新羅の宮中に送った。真平王は、その神秘的な変化を不思議に感じ、いっそう薯童を尊敬し、常に手紙を送り安否を尋ねるようになった。薯童は、このようにして人心を得て王位に登った。

ある日、武王が夫人とともに獅子寺に行こうとして、竜華山のふもとの大きな池のほとりに来ると、弥勒三尊が池の中から現れてきたので、車を停めて敬意を示した。夫人が王に言った。

「ここに大きな寺を建てて下さい。正真の私の願いです」

王はそれを許した。知命法師のもとへ行き、池を埋めることを相談すると、法師は神通力によって一晩の間に山を崩して池を埋めて平地にした。このように弥勒三尊の像をつくり、殿と塔と廊をそれぞれ3か所に立て、寺の名前を弥勒寺—『国史』では王興寺という—とした。真平王が多くの工人を送り、その普請を助けて、その寺は今も残っている。—（『三国史記』にはこの方を法王の息子であるとしているが、ここでは寡婦の息子となっているので、詳しいことはわからない）—（『三国遺事』巻2 紀異2 武王）

史料Eの（ハ）の善花公主について、弥勒寺跡の西塔の舍利奉安記の発掘以後、実在人物ではなく、説話上の虚構としてみなす傾向があるが、最近の考古学的検討を通じて、善花公主の実在を推定した研究^[41]が出ており、注目されている。この研究では益山の双陵の編年を出土遺物を通じて検証したところ、小王墓がまず作られ、大王墓が後で作られたと推定し、大王墓の場合、大小の座金具と木棺装飾金具の相対編年が7世紀中葉に該当し、弥勒寺跡の西石塔出土の舍利奉安記より技術的に退化していることから、639年より遅くに築造されたものとみられている^[42]。そして、小王墓の主人公を小王墓出土の金銅製透彫座金具の製作時期が7世紀前半に該当することから、6世紀末に死亡した恵王、法王や、642年に死亡した武王の王妃とみるのは難しく、武王より先に死亡した別の王妃、すなわち善花公主で

ある可能性が最も高いとされる^[43]。このような考古学的な検討結果や、武王代の政治状況を考慮すると、善花公主の存在を認めることは、大きな無理がないと考えられる。

また善花公主が真平王の娘であるか、益山勢力であるかという問題は後で検討するが、新たな金石文や史料の発掘によって武王の別の王妃が出現しない以上は、善花公主を義慈王の生母として把握することが適当であると思われる。もちろん現在知られる史料だけで義慈王の生母を推定することも問題がある。史料に知られていない武王の王妃がさらにいる可能性があるため、現在残された史料上では義慈王の生母が誰であるか特定するのは難しいとみられる。しかし、義慈王の太子冊封、および即位初期の政変が発生することになった背景を考えるならば、義慈王の生母が「善花公主」だったとみるのは、当時の政治状況に照らし合わせてみると、もっとも合理的だと考えられる。

まず義慈王は、太子冊封だけでなく、即位するときまでも相当な困難を経ているとみられる。

F. 義慈王は武王の元子である。雄壮で勇敢であり、胆力と決断力があつた。武王の在位33年に太子となった。父母に孝養を尽くし、兄弟とは友愛があつたので、当時海東の曾子と呼んだ。(『三国史記』巻28、義慈王即位年)

史料Fは、義慈王は武王の元子であるにもかかわらず、武王33年という遅い時期に太子に冊封されたことに、太子競争があつたことと、実の母ではない別の王妃を母として孝養を尽くし、異腹兄弟にも友愛をもって行動したことによって、即位することができたことを暗示している^[44]。史料Cで豊章が倭に送られた状況と、史料Fを結びつけてみると、武王の元子である義慈が熾烈な太子競争を経て、即位するときまでも困難を経験していたことを斟酌することができ、このような対立関係が結局義慈王2年(642)の政変の形態として現れることになったことがわかる。一連の過程は、義慈が自身の生母ではない王妃と、その王妃の本家勢力と持続的に対立していたという解釈を可能とする。義慈の母系側に問題がなかったならば、このような対立が発生し難い。したがって、多くの研究者が義慈の生母は、善花公主であり、武王後期に権力を掌握した沙毛王后および沙毛氏勢力と対立したり^[45]、あるいは対立のうへ妥協をしたりしたとみているのである^[46]。

一方、義慈が当時の権力を掌握した沙毛氏および沙毛王后と対立していたにもかかわらず、いかにして太子に冊封され即位できたのかという疑問が提起されるだろう。これは、義慈が元子と表現されていることに留意する必要があるだろう。義慈のもっとも強力な支持勢力は、元子を次期王位継承者としようとした武王だったと考えられる。当時、大王陛下と呼ばれる

ほどの強力な王権を構築した武王の支持が義慈のもっとも心強い支えとなっただろうし、そのような支持にもかかわらず、沙毛氏勢力が強かったことから、義慈は自身の姿勢を低くした処世術をとらねばならず、太子冊封時期も遅くならざるをえなかったと考えられる。

そうだとすれば、義慈王の生母である善花公主は、いかなる人であるのかを把握する必要があるが、これについては史料 E の（ハ）によって真平王の三番目の娘とみる立場と、薯童説話を再解釈し益山勢力の娘とみる立場に分かれている^[47]。

まず多くの研究者が従っている善花公主が益山勢力という主張を再検討してみよう。先に検討したとおり、義慈王の生母を善花公主とすると、武王代には善花王妃、その息子である義慈、そして彼らを支持する益山勢力と、沙毛王后とその息子である豊章、そして泗泚地域を基盤にする沙毛氏勢力^[48]が対立関係として設定できる。このような対立関係は義慈の太子冊封を経て、642年初期の政変によって、結果的に義慈王の勝利に帰結したといえるだろう。

しかし、善花公主を益山勢力とみると、このように整理するには、いくつかの問題点が発生することになる。まず益山勢力を対新羅関係で平和共存を追究した勢力として規定する研究^[49]によれば、義慈王初期の政変によって結果的に義慈王を支持した益山勢力が政治権力を占めていた可能性が高いにもかかわらず、義慈王代に持続的な対新羅攻撃が展開されている状況を説明しにくくなるという問題が起こる^[50]。

- G. 2年秋7月 王が自ら軍士を率いて新羅を討ち、獼猴城など40余城を陥落させた。
- 8月將軍允忠を送り、軍士1万名を率いて新羅の大耶城を攻撃した。
- 3年冬11月 王が高句麗と和親をして新羅の党項城を奪い、(唐)に朝貢する道を塞ごうとした。
- 5年夏5月 王は(唐)太宗が自ら高句麗を征伐しつつ、新羅から軍士を徴発したという消息を聞き、その隙に乗じて新羅の7城を襲撃して奪った。
- 7年冬10月將軍義直が歩兵と騎兵3千名を率いて、新羅の茂山城下に進み駐屯し、軍士を分けて甘勿城と桐岑城の2城を攻撃した。
- 8年春3月 義直が新羅の西側辺境の腰車城など10余城を襲撃して奪った。
- 9年秋8月 王が佐平殷相を送り、精鋭軍士7千名を率いて、新羅の石吐城など7城を攻撃して奪った。
- 15年8月 王は高句麗と靺鞨とともに新羅の30余城を攻撃して破った。
- 19年4月 將帥を送り、新羅の独山城と桐岑城の2城を討った。

義慈王代には史料 G のように、全時期にわたって新羅を持続的に攻撃している。このような状況を勘案すると、対新羅関係で平和的友好的関係を志向する益山勢力が権力を握っているとみるのは難しい^[51]。義慈王や当時の執権勢力は、新羅に対する攻撃を優先課題としていたとみることが合理的である。

もし益山勢力が対新羅関係において持っている性格は除外して、単純に義慈王の生母が益山勢力であるという見解にだけしたがったとしても、解決することは難しい問題がある。一般的に武王の生母は、益山出身であると認められているが、義慈王の生母も益山出身であるならば当然益山勢力は義慈王を支持したのだろう。武王代に益山遷都などの議論と試みがあると、地域的に自然と益山勢力はそのような政策を支持し、反対に泗泚地域に権力基盤を持った勢力は反対したのだという点は誰もが同意している。そうだとすれば、義慈王は父武王の後を継ぎ、益山地域に関心を持って益山勢力を重要視しなければならないことが理にかなっているのではないかと思う。少なくとも義慈王が642年の政変を通じて自身の王権を安定させたとみることができるとき点では、益山勢力が権力の中枢にいたとみるべきであるが、現在までの研究者からは益山勢力の実体が明らかになっていないのである。義慈王の生母が益山出身であり、益山勢力が義慈を支持したのであれば、義慈王代に重要視される益山勢力の実体を究明する必要があるだろう。

また武王後期に義慈王が太子に冊封された時点から、地域的に益山よりは泗泚地域が重視されている姿が現れている。武王後期には泗泚宮の中枢^[52]、王興寺の王宮^[53]、宮南池の造成^[54]、泗泚の河北浦での宴会^[55]などが泗泚地域を中心に行われているのである。このような記事を通じて、武王代に益山経営が行われたが、武王後期になると益山経営が失敗したとみられるのである^[56]。これとは別に、武王代に益山に遷都が行われていたとみる場合にも、武王後期^[57]、あるいは義慈王初期^[58]にはまた首都が泗泚に移っていたと把握している。百濟滅亡当時、羅唐連合軍の攻撃を受けた百濟の首都が泗泚城であったことから、その時点の首都が泗泚であることは言うまでもない。益山勢力が義慈の支持勢力であったのならば、なぜ義慈が太子に冊封される時点である武王後期から泗泚地域が再び注目されていたのか解明する必要があるだろう。このような状況から姜鍾元は、義慈の生母は益山出身の善花公主であるとみなしつつも、義慈の支持勢力は泗泚地域を基盤にした沙氏勢力であると捉えているのである^[59]。当時の権力関係の状況からみると、ある程度理解できるが、義慈王の生母が誰であるのかを中心にみると納得することが難しいだろう^[60]。

以上のように義慈王の生母である善花公主を益山出身とみることが難しいとすれば、善花公主を『三国遺事』武王条に現れるように、真平王の三番目の娘とみる見解が残るが、筆者は更なる問題があると考ええる。善花という名前は、弥勒仙花と音が類似する点から、百濟や

新羅における弥勒信仰と関連して使用される名であり、真平王は自身の家系をクシャトリア身分と同一視しつつ積種意識を形成したために、真平王の娘と見なすのは難しいという指摘^[61]がある。また真平王代がもっとも家族の神性概念が強かった時代であり、聖骨間の婚姻以外には絶対に不可能な族内婚が行われており、善花公主は正史にその名前が伝えられていないだけでなく、百濟王室と新羅王室が婚姻をしたならば、その重要な事実が正史に記録されていないはずがないという指摘^[62]が既に提出されている。筆者もこのような見解が妥当であると考え。積種意識が強ク形成された真平王代に公主の名前を弥勒信仰と関連させたり、公主を他国に嫁がせたりしていたとみるのは難しいだろう。

ここでいくつかの善花公主を真平王の三番目の娘とみることが難しい点をさらに補うなら、まず真平王の三番目の娘が武王と婚姻したとみるには、当時善花公主の年齢がとても幼い。李道學は、金春秋の出生時点である603年を指標として、善花公主の年齢を推算したが、善花公主の姉であるといえる天命夫人が580年頃出生し、善花公主は583年頃出生したとみた^[63]。武王は600年に即位し、義慈は595年頃に出生したものと推定されるが、そのようにみると善花公主は13歳頃に義慈王を産んだことになるのである。いずれにせよ、善花公主が義慈王を産んだとみるには、年齢が非常に幼いのである。このような問題点によって、李道學は、善花公主が真平王の三番目の娘であるということは、説話的面白みを増すために、もっとも美しいという三番目の娘として登場したのであり、真平王の娘であることは明らかであるという結論を下している^[64]。しかし、筆者が善花公主の年齢を推算した結論をくだすのであれば、三番目の娘であるということだけが説話的虚構とみなすのではなく、真平王の三番目の娘であるということが説話的虚構とみななければならないと考える。

また新羅が他国との婚姻同盟を推進した事例が二つ残っているが、百濟の東城王との婚姻、そして大加耶との婚姻がある。この場合をみると、前者は伊飡比智の娘^[65]、後者は伊飡比助夫の妹^[66]を送り婚姻した。王室と近い間柄には違いないが、王室の公主を送ったのではない。もちろん当時の王室の公主がいなかったとも考えられるが、新羅から公主を他国に嫁がせた事例はないのである。

そのうえで婚姻の相手である武王を検討してみよう。善花公主が義慈王の生母であるならば、義慈王が出生した時点から推定できる595年より早い時期に婚姻していなければならない。だとすると、その当時は威徳王の治世であった。武王が当時の百濟王室の有力な王子でもなく、まだ頭角をはっきりと示すには難しい時期であった。このような武王に新羅王室が公主を婚嫁させたというということは、常識的に考えて納得することは難しいものであろう。

しかし『三国遺事』武王条の内容を完全に説話的虚構とみなすことも難しいと考える。明らかに義慈王は太子冊封や即位時に母系問題に起因するとみられる困難さを経ており、その

生母を益山出身とみなすのが難しいのならば、『三国遺事』武王条にある程度耳を傾けなければならない。これと関連して『三国遺事』紀異篇において百済の王のなかで唯一新羅に攻勢的であった武王の話だけを記録したのは、善花公主の結婚譚のためであり、武王と善花公主の話はその当時特記する必要がある事件であったのであり、歴史記録として残されたと考えられるという見解^[67]が注目される。何らの根拠もなく、想像によってだけ百済王と新羅公主の結婚譚が残ったとみるのは難しい。『三国遺事』武王条でも薯童が善花公主と婚姻したことを通じて、人心を得て、王位に登ったことを示しているように、武王の即位には新羅の女性との婚姻という当時としては特記すべき事実があったとみるべきである。ただし、当時の状況を見ると、善花公主という表現は説話的潤色である可能性が高く、実際には新羅王族や貴族の娘と婚姻したとみるのが妥当だと考えられる^[68]。まだ頭角を現していない時期の武王が新羅の女性と婚姻し、しだいに名前を知られるようになり、以後武王が王位に即位して、このような説話が残ったとみることができるのである。

最後に武王が「善花公主」および「沙毛王后」と婚姻した時点を考えてみると、善花公主は武王即位前の少なくとも595年以前に婚姻したことから、沙毛王后は『日本書紀』皇極紀の翹岐から逆算するならば、正確にはわからないが、武王即位の初期以前に婚姻したものと整理できる。武王が即位する前に、すでに何人かと婚姻したとみることも難しいことから、沙毛王后は武王が即位した後、いくらしもない時に婚姻したと把握しておこうと思う。したがって、善花公主との婚姻が先にあって、その後に沙毛王后を迎えたとみられる。そのように考えると、善花公主と沙毛王后が王妃として存在した時期がある程度は重なることになるが、誰が正妃であるのかという問題が起こる。これは百済王室の婚姻形態が一夫一妻制度であるのか、一夫多妻制度であるのかという問題と関連するのだが、一夫多妻制ならば善花王妃が先妃、沙毛王后が後妃となり、一夫一妻制度だとしても善花王妃が正妃だったが、後に沙毛王后が正妃になったとみることができる。少なくとも武王代や義慈王代の後継をめぐる葛藤が続いている状況を見ると、正妃がいてその正妃の所生の子供だけが王位継承権を持っていたとみるのは難しいことから、何人かの王妃が存在しており、その王妃たちの生んだ子供たちすべてが王位継承権を持っているとみるのが良いのではないかと思う。

以上の内容を整理すると、現在まで知られている史料上には善花公主を義慈王の生母とみるのがもっとも合理的である。善花公主を益山出身とみたり、真平王の三番目の娘とみたりするにはいくつかの問題があり、善花公主は新羅王族や貴族の娘とみることを代案として提示した。そして善花公主は、武王即位以前に、沙毛王后は武王即位初期に婚姻し、善花公主が先妃、沙毛王后が後妃と把握した。

6. むすびに

弥勒寺西塔から舍利奉安記が出土してから、多くの研究者が武王代と義慈王初期の権力関係と武王の王妃および義慈王の生母について研究をしてきた。しかし、研究者ごとに武王の王妃や義慈王の生母が誰であるのかについて異なる結論を下していたことから、筆者はこれを解明するために『日本書紀』皇極紀元年の記事を中心にして、そこに記録された「国主母」から義慈王の生母が誰であるのか、舍利奉安記の「沙毛王后」と『三国遺事』武王条の「善花公主」をどのようにみることができるのかを考えてみた。

『日本書紀』皇極紀に記録された「国主母」と義慈王の関係は、『日本書紀』皇極紀に記録された百済の政変の性格を分析し、その政変が「国主母」の死から触発された点を勘案するならば、「国主母」と義慈王は権力基盤が異なるものと捉えられる。そのため「国主母」と義慈王は実の母子関係とみるのは難しい。『日本書紀』皇極紀の「国主母」は、沙毛智積とともに記録されている点と、舍利奉安記の「沙毛王后」が記録された時点から3年しか時差がない点などをみると、舍利奉安記の「沙毛王后」と同一人物とみられる。そうすると現代まで明らかになった史料を通じてみると、『三国遺事』武王条の「善花公主」を義慈王の生母とみるのがもっとも合理的であるといえる。

善花公主の出身については益山勢力という見解が多いが、そのように考えるのは難しい。義慈王が善花公主の所生であるにもかかわらず、武王後期から泗泚地域を重視する姿勢がみられ、義慈王が自身の太子冊封と即位を牽制した勢力を完全に駆逐した以後にも、益山勢力を重要視する姿がみられない点などを根拠にすることができるだろう。また善花公主を真平王の三番目の娘とみなすことも受け入れがたい。真平王代の積種意識が強化されているのに、娘が名前を弥勒信仰と関連付けられていたとみることができず、真平王の三番目の娘であるならば年齢上、武王即位前に婚姻するのは難しい点、武王が即位する以前の状況に新羅王室から公主を嫁がせることは現実性が低いからである。しかし『三国遺事』武王条は、当時には特記すべき事件であったため、記録として残ったという点を考慮するならば、百済の武王が即位する前に新羅王族、あるいは貴族の娘と婚姻したことが説話的潤色を通じて善花公主という名前として残ったといえるだろう。最後に婚姻の時点を検討してみると、善花公主は武王の即位以前である595年以前に婚姻し、沙毛王后は武王即位初期に婚姻したと把握できることから、善花公主が武王の先妃、沙毛王后が武王の後妃であったといえる。

注

[1] 以下「舍利奉安記」と省略。

- [2] 以下「沙毛王后」と省略。
- [3] 弥勒寺跡西塔の舍利奉安記の発掘以後、武王代の政治状況について発表された重要な論文は次のとおりである。
- 姜鍾元 a, 「百濟武王の出系と王位継承」『歴史と談論』56, 2010。
- 姜鍾元 b, 「百濟武王の太子冊封と王権の変動」『百濟研究』54, 2011。
- 金相鉉 a, 「彌勒寺西塔舍利奉安記の基礎的検討」『大発見舍利莊嚴彌勒寺の再照明』, 馬韓百濟文化研究所, 百濟学会, 2009。
- 金相鉉 b, 「百濟武王代の仏教界の動向と彌勒寺」『韓国史学報』37, 2009。
- 金壽泰 a, 「百濟武王代の彌勒寺西塔舍利奉安」『新羅史学報』16, 2009。
- 金壽泰 b, 「百濟武王代の対新羅関係」『百濟文化』42, 2010。
- 金榮洙, 「舍利奉安記の出現と『薯童謠』解釈の視角」『益山彌勒寺と百濟—西塔舍利奉安記出現の意義』, 一志社, 2011。
- 金英心, 「舍利記銘文を通じて見た百濟泗泚時期国王と貴族勢力の権力関係—沙氏勢力との関係を中心に」『韓国史研究』163, 2013。
- 金周成 a, 「百濟武王の政局運営」『新羅史学報』16, 2009。
- 金周成 b, 「彌勒寺址西塔舍利奉安記出土による諸説の検討」『東国史学』47, 2009。
- 南廷昊, 「義慈王前期 政局運営の特徴」『歴史教育論集』44, 2010。
- 盧重國 a, 「武王及び義慈王代の政治改革」『百濟政治史研究』, 一潮閣, 1988。
- 盧重國 b, 「彌勒寺創建と知命法師」『百濟社会思想史』, 知識産業社, 2010。
- 文暉鉉, 「百濟武王と善花公主攷」『新羅史学報』19, 2010。
- 文安植, 「義慈王の親衛政変と国政刷新」『東国史学』47, 2009。
- パク・ヒョンスク, 「百濟武王の益山経営と彌勒寺」『韓国史学報』36, 2009。
- 辛鍾遠, 「舍利奉安記を通じて見た『三国遺事』武王祖の理解」『益山彌勒寺と百濟—西塔舍利奉安記出現の意義』, 一志社, 2011。
- 李道學, 「彌勒寺址西塔「舍利奉安記」の分析」『白山学報』83, 2009。
- 李鎔賢, 「彌勒寺建立と沙毛氏—〈舍利奉安記〉を糸口に—」『新羅史学報』16, 2009。
- チョン・ジェユン, 「彌勒寺舍利奉安記を通じて見た 武王・義慈王代の政治的動向」『韓国史学報』37, 2009。
- チョ・ギョンチョル, 「百濟益山彌勒寺創建の信仰的背景—彌勒信仰と法華信仰を中心に—」『韓國思想史學』32, 2009。
- 朱甫噉, 「彌勒寺址出土舍利奉安記と百濟の王妃」『百濟學報』7, 2012。
- [4] 金相鉉 b 前掲論文, pp. 24-26, 金周成 b 前掲論文, pp. 30-32。
- [5] 盧重國 b 前掲論文, pp. 29-32, 李道學前掲論文, pp. 252-255。
- [6] 金壽泰 a 前掲論文, pp. 76-79。
- [7] いくつかの学会において発表された論文の重要内容は、金榮洙前掲論文, pp. 89-94 によく整理されているので、参照して頂きたい。
- [8] 表の内容は、注3の論文内容を整理したものである。著者の後の括弧は論文発表年代で、著者の順序は論文発表年代であり、同じ年代である場合、著者名をカナダラ順に整理した。
- [9] チャン・ミエ, 「義慈王代の政治勢力の変化と対外政策」『歴史と現実』85, 2012。
- [10] 以下「国主母」と省略。
- [11] 以下「善花公主」と省略。
- [12] 義慈王2年に該当する。
- [13] 二月丁亥朔戊子 遣阿曇山背連比良夫 草壁吉士磐金 倭漢書直縣 遣百濟甲使所 問彼消

息 弔使報言 百濟國主謂臣言 塞上恆作惡之 請付還使 天朝不許 百濟弔使僱人等言 去年十一月 大佐平智積卒 又百濟使人擲崑崙使於海裏 今年正月 國主母薨 又弟王子兒翹岐 及其母妹女子四人 內佐平岐味 有高名之人卅餘 被放於嶋。

- [14] 表1 参照。
- [15] 金周成 b 前掲論文, p. 31。
- [16] 李道學前掲論文, pp. 244-247。
- [17] 朱甫暉前掲論文, pp. 39-47。
- [18] 金英心, 「婚姻習俗と家族構成原理を通じてみた韓国古代社会の女性」, 『講座 韓国古代史』10, 2012, pp. 341-343。
- [19] 表1 で金周成, 李鎔賢を除外した他の研究者は武王の王妃が何人だったかを指摘している。
- [20] 朱甫暉前掲論文, p. 40。
- [21] 〔前面〕 竊以法王出世隨機赴感應物現身如水中月 是以託生王宮示滅雙樹遺形八斛利益三千 遂使光曜五行澆七遍神通變化不可思議 我百濟王后佐平沙毛積德女種善因於曠劫受勝報於今生 撫育萬民棟梁三寶 故能謹捨淨財造立伽藍 以己亥
〔後面〕 年正月廿九日奉迎舍利 願使世世供養劫劫無盡用此善根仰資大王陛下年壽與山岳齊固寶曆共天地同久
上弘正法下化蒼生 又願王后即身心同水鏡照法界而恒明身 若金剛等虛空而不滅 七世久遠并蒙福利 凡是有心俱成佛道
- [22] 金英心前掲論文, pp. 17-18。
- [23] 『日本書紀』皇極紀元年条に記録された百濟政変の性格については, 南廷昊, 「『日本書紀』に見られる豊章と翹岐関連記事の再検討」『百濟研究』60, 2014, pp. 143-148 を参照して頂きたい。
- [24] この記事の時点である 631 年は, 義慈王の治世ではなく, 武王の治世であることから, 記事の紀年に誤謬があるとみることもできるが, 筆者はこの時点を認められると考える。詳しい内容は, 南廷昊前掲論文, 2014, pp. 128-132 を参照して頂きたい。
- [25] 南廷昊前掲論文, 2014, pp. 132-138。
- [26] 南廷昊前掲論文, 2014, pp. 139-140。
- [27] 豊章と翹岐の関係については, 金周成 a 前掲論文, pp. 276-277, 南廷昊前掲論文, 2014, pp. 132-138 を参照して頂きたい。
- [28] 李道學, 文安植, チョン・ジェユンらもこの点を指摘している。
- [29] 金周成 a 前掲論文, p. 277。
- [30] 金壽泰は, 百濟政変の性格を義慈王と王弟勢力の葛藤とみながらも, 「国主母」を義慈王の生母と把握し, 国主母が沙毛王后ではなく, 善花公主と対立した王妃とみなさないが, いかなる王妃であるかは知ることが難しいと言っている。一方, 「翹岐」と関連した王妃を別に想定し, この王妃を善花公主として把握する可能性があると言った (金壽泰前掲論文, pp. 11-13, 2009)。
- [31] 大佐平智積の死は, 智積が百濟の使臣として倭に来ている事実があるので, 誤った内容である。しかし, 筆者は, この記事は大佐平智積が大佐平の地位から追われ, 行方をくらませたために, 下級官吏たちの間では智積が死んだという噂が出てきたことを伝えていると考えた (南廷昊前掲論文, 2014, p. 145)。
- [32] 金壽泰 b 前掲論文, pp. 78-79。
- [33] 盧重國 b 前掲論文, pp. 430-432。
- [34] 義慈王の子息である扶余隆の出生年 (615 年) から義慈王の出生年を推定するならば, だいたい 595 年頃とみることができる。
- [35] 姜鍾元 b 前掲論文, pp. 150-161。

- [36] 盧重國 b 前掲論文, p. 432。
- [37] 南廷昊前掲論文, 2014, pp. 132-138。
- [38] 『日本書紀』欽明紀 14 年条の高句麗との戦闘記事から威徳王の年齢を推測できる。
- [39] 『三国史記』百濟本紀武王 28 年。
- [40] チャン・ミエ前掲論文, pp. 231-235。
- [41] 李炳鎬, 「百濟泗泚期の益山開発の時期とその背景」『百濟研究』61, 2015。
- [42] 李炳鎬前掲論文, pp. 71-83。
- [43] 李炳鎬前掲論文, pp. 89-91。
- [44] 南廷昊前掲論文, 2010, pp. 140-142。
- [45] 表 1 の李道學, 文安植, チョン・ジェユン, 金英心らがこのような立場である。
- [46] 表 1 の姜鍾元の見解である。
- [47] 表 1 参照, 金壽泰が善花公主を益山勢力とみる見解を発表し, その見解に従う研究者が多い。
- [48] 最近, 沙弋氏の勢力基盤を益山地域とみようという傾向もあるが, 一般的に沙弋氏の勢力基盤を泗泚地域とみる見解が多い。沙弋氏の勢力基盤についての内容は, 金英心前掲論文, pp. 20-24 を参照して頂きたい。
- [49] 金壽泰前掲論文, 2010, pp. 79-81。
- [50] 金壽泰は, 『日本書紀』皇極紀の「国主母」を義慈王の生母とみて, 彼女が誰であるかについての見解は留保しているが, 文安植, チョン・ジェユン, 姜鍾元たち相当数の研究者は, 義慈王の生母を善花公主とし, その善花公主は益山勢力であるという金壽泰の見解を受容している。
- [51] 南廷昊前掲論文, 2010, p. 148。
- [52] 『三国史記』百濟本紀武王 31 年。
- [53] 『三国史記』百濟本紀武王 35 年。
- [54] 『三国史記』百濟本紀武王 35 年。
- [55] 『三国史記』百濟本紀武王 37 年。
- [56] 盧重國, 「武王及び義慈王代の政治改革」『百濟政治史研究』, 一潮閣, 1988, pp. 197-203。
- [57] 李道學, 「百濟武王代益山遷都説の再検討」『慶州史学』22, 2003, pp. 82-86。
- [58] 崔完主, 「百濟末期武王代益山遷都の再解釈」『馬韓百濟文化』20, 2012, p. 88。
- [59] 姜鍾元 b 前掲論文, pp. 152-157。
- [60] 義慈王の生母を益山出身とみるのかという問題は, 武王代と義慈王代の権力関係の変化とともに考える必要があるが, 本稿は武王の王妃と義慈王の生母が誰であるのかに焦点を当てようとしたものである。別稿で権力関係の変化については論じたい。
- [61] 金壽泰 b 前掲論文, pp. 75-78。
- [62] 文暻鉉前掲論文, pp. 325-326。
- [63] 李道學前掲論文, 2009, p. 260。
- [64] 李道學前掲論文, p. 261。
- [65] 『三国史記』百濟本紀東城王 15 年。
- [66] 『三国史記』新羅本紀法興王 9 年。
- [67] パク・ヒョンスク前掲論文, p. 336。
- [68] 南廷昊前掲論文, 2010, pp. 145-146。

参考文献

- 姜鍾元, 「百濟武王の出系と王位継承」『歴史と談論』56, 2010。
- 同, 「百濟武王の太子冊封と王権の変動」『百濟研究』54, 2011。

- 金相鉉, 「彌勒寺西塔舍利奉安記の基礎的検討」『大発見舍利莊嚴 彌勒寺の再照明』, 馬韓百濟文化研究所, 百濟学会, 2009。
- 同, 「百濟武王代の仏教界の動向と彌勒寺」『韓国史學報』 37, 2009。
- 金壽泰, 「百濟武王代の彌勒寺西塔舍利奉安」『新羅史學報』 16, 2009。
- 同, 「百濟武王代の対新羅関係」『百濟文化』 42, 2010。
- 金榮洙, 「舍利奉安記の出現と『薯童謠』解釈の視角」『益山彌勒寺と百濟—西塔舍利奉安記出現の意義』, 一志社, 2011。
- 金英心, 「舍利記銘文を通じて見た百濟泗泚時期国王と貴族勢力の権力関係—沙氏勢力との関係を中心に」『韓国史研究』 163, 2013。
- 金周成, 「百濟武王の政局運営」『新羅史學報』 16, 2009。
- 同, 「彌勒寺址西塔舍利奉安記出土による諸説の検討」『東国史学』 47, 2009。
- 南廷昊, 「義慈王前期 政局運営の特徴」『歴史教育論集』 44, 2010。
- 南廷昊, 「『日本書紀』に見られる豊章と翹崎関連記事の再検討」『百濟研究』 60, 2014。
- 盧重国, 「武王及び義慈王代の政治改革」『百濟政治史研究』, 一潮閣, 1988。
- 同, 「金石文木簡資料を活用した韓国古代史研究の課題といくつかの再解釈」『韓国古代史研究』 57, 2010。
- 同, 「彌勒寺創建と 知命法師」『百濟社会思想史』, 知識産業社, 2010。
- 文暎鉉, 「百濟武王と善花公主攷」『新羅史學報』 19, 2010。
- 文安植, 「義慈王の親衛政変と国政刷新」『東国史学』 47, 2009。
- パク・ヒョンスク, 「百濟武王の益山経営と 彌勒寺」『韓国史學報』 36, 2009。
- 辛鍾遠, 「舍利奉安記を通じて見た『三国遺事』 武王祖の理解」『益山彌勒寺と百濟—西塔舍利奉安記出現の意義』, 一志社, 2011。
- 李南奭, 「百濟古墳と益山雙陵」『馬韓百濟文化』 15, 2001。
- 李道學, 「百濟武王代益山遷都説の再検討」『慶州史学』 22, 2003。
- 同, 「海東會子義慈王の生涯」『百濟実録義慈王』, 扶余郡文化財保存センター, 2008。
- 同, 「彌勒寺址西塔「舍利奉安記」の分析」『白山學報』 83, 2009。
- 李炳鎬, 「百濟泗泚期の益山開闢の時期とその背景」『百濟研究』 61, 2015。
- 李鎔賢, 「彌勒寺建立と沙毛氏—〈舍利奉安記〉を糸口に—」『新羅史學報』 16, 2009。
- チャン・ミエ, 「義慈王代の政治勢力の変化と対外政策」『歴史と現実』 85, 2012。
- チョン・ジェユン, 「彌勒寺舍利奉安記を通じて見た 武王・義慈王代の政治的動向」『韓国史學報』 37, 2009。
- チョ・ギョン Chol, 「百濟益山彌勒寺創建の信仰的背景—彌勒信仰と法華信仰を中心に—」『韓国思想史学』 32, 2009。
- 朱甫墩, 「彌勒寺址出土舍利奉安記と百濟の王妃」『百濟學報』 7, 2012。
- 崔完圭, 「益山地域の百濟古墳と武王陵」『馬韓百濟文化』 15, 2001。
- 同, 「百濟末期武王代益山遷都の再解釈」『馬韓百濟文化』 20, 2012。

(ナム ジョンホ 慶北大学校師範大学附設高等学校教師)
 (うえだ きへいなりちか 早稲田大学大学院博士後期課程)